

## オオタナゴを霞ヶ浦から逸出させてはいけない

萩原富司（土浦の自然を守る会）

### 1. はじめに

人間活動のグローバル化に伴う外来生物の侵入は、地域個体群の絶滅に拍車をかけており、北米原産のオオクチバス (*Micropterus salmoides*) 等の生息地拡大により在来淡水魚の絶滅危惧種はさらなる危機を迎えている。中国原産のタイリクバラタナゴ (*Rhodeus ocellatus ocellatus*) は 1945 年に日本の霞ヶ浦に侵入した最初のタナゴである。本種は産卵床である二枚貝を乗り物として琵琶湖に移動し、さらに遊漁種苗として人気の高かった琵琶湖のコアユに混じって全国の水域に拡散した。そして日本の在来亜種ニッポンバラタナゴ (*Rhodeus ocellatus kurumeus*) と交雑して、在来亜種としてのアイデンティティーを失わせ亜種としての存続に危機的影響を与えた。

2001 年に在来タナゴに比べると非常に大きく背鰭が前後に長い、オオタナゴ (*Acheilognathus macropterus*) が、東日本の在来タナゴの重要な生息地である霞ヶ浦で認められた (萩原、2002)。ここには日本固有種であるタナゴ (*Acheilognathus melanogaster*)、在来種であるヤリタナゴ (*Tanakia lanceolata*) とアカヒレタビラ (*Acheilognathus tabira erythropterus*)、流域外侵入種カネヒラ (*Acheilognathus rhombeus*) およびタイリクバラタナゴ (*Rhodeus ocellatus ocellatus*) の 5 種のタナゴが生息している。この大型のタナゴは日本に侵入した 2 番目のタナゴとなる。ここではタナゴ類組成の時系列変化から他の先住タナゴ類への影響について考察したので報告する。

### 2. オオタナゴの特徴と霞ヶ浦流域における拡散状況

図 1 に婚姻色を呈した雄の個体を示す。体は側扁して成魚になるほどその傾向は強い。鰓蓋から 5 枚目辺りの鱗に明瞭な青色斑がある。尻ビレには 3 本の明瞭な白線を形成する。尻ビレの婚姻色に比べると体の婚姻色はほとんど発現しない。腹部はやや黒くなる。口ひげは非常に短く、大型個体はホルマリンで固定後口の下側から逆光で観察するとわずかに認められるが、小型個体のそれは肉眼で認めることは難



図 1 婚姻色を呈した雄の個体

しい。背ビレ軟条数は 15~18 本であった。全長は 12cm 以上にもなり、在来種に比べると大きい。

2000 年から 2006 年におけるタナゴ類の組成の時系列変化を図 2 に示す。試料採取した潮来地点と清明川河口地点は、オオタナゴ初見地点より東西に約 15km 離れている。この 2 地点は、2000 年以降タナゴ類の固定試料が保存されており、また 2002 年まではオオタナゴが捕獲されなかったため、オオタナゴの優占経過を調べるために設定した。主に釣りにより採取したフォ

ルマリン固定試料について、タナゴ類を同定計数した。

潮来地点はもともとアカヒレタビラが優占していたが、'03年よりオオタナゴが認められるようになり'07年には全個体数の80%以上を占めるに至った。同様に清明川河口地点でも、'02年には在来種であるタナゴとアカヒレタビラが90%を占めたが、'04年にはオオタナゴが認められ、'07年には全個体数の30%を占めた。なお両地点では在来種であるヤリタナゴは捕獲されなかった。図2下段は2地点の1時間1人あたりの釣りによるタナゴ類の捕獲効率を示した。捕獲効率は年によって大きく変動するが、はっきりした増加傾向は認められない。したがって2地点ともオオタナゴが増加した分、先住タナゴが減少していると言える。

### 3. おわりに

本種は年とともに生息域を霞ヶ浦全体に拡大している。タナゴ亜科全体の個体数が増えないにもかかわらず本種の優占率を増していた。このことから本種は他種を席卷して侵略的に増えていることが考察された。淀川流域には近年まで日本固有種であるイタセンパラが生息しており、仮に残存個体がいたとしてもオオタナゴの侵入が、本種に決定的な打撃を与えることが危惧される。また、侵入後ではイタセンパラの人工増殖個体による野生復帰事業にも大きな障害になるものと考えられる。タナゴ類は歴史的に二枚貝を乗り物にして拡散した事例が多く、淡水真珠養殖に用いられるヒレイケチョウガイや、観賞魚業者による二枚貝の霞ヶ浦からの商業的移動には十分な注意を喚起する必要がある。また釣り人によるオオタナゴの霞ヶ浦からの持ち出しは、常に行われており、このような好事家には、パンフレットの配布などを通じて外来生物に対する正しい情報を伝える努力が必要と考える。

タナゴ類捕獲総個体数 ND: データなし

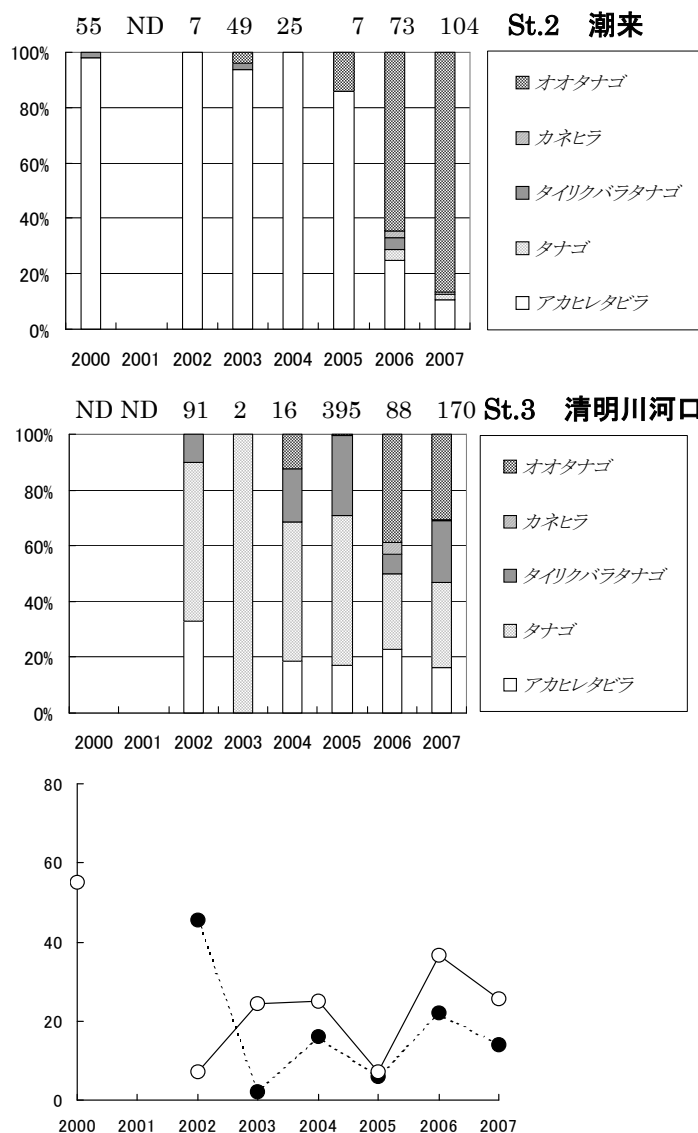


図2 タナゴ類の組成(上、中段)と捕獲効率(下段 単位: 個体/時間/人)の経年変化